

研究ノート

瀬戸窯業試験場所蔵デザイン研究試作品等の有効活用について

長谷川恵子*1、光松正人*2

Utilization of Design Research Prototypes Accumulated
by Seto Ceramic Research Institute

Keiko HASEGAWA*1 and Masato MITSUMATSU*2

Seto Ceramic Research Institute*1*2

瀬戸窯業試験場が所蔵するデザイン研究試作品を産地陶磁器業界が利活用しやすい形に整理して公開、運用するために、試作品情報、画像、研究報告書、実物を連携させるデジタルアーカイブを構築することとし、アーカイブの素材となる台帳の作成に着手した。これまでに開所から昭和期までの試作品のデータに基づいて昭和期のデザイン試作品のまとめを行い、時代背景と研究テーマとの関係、傾向と特徴を整理、分析し、試作テーマや内容の推移を考察した。

1. はじめに

昭和 46 年に愛知県瀬戸窯業技術センターとして設置された瀬戸窯業試験場が創立以来 50 年間に蓄積したデザイン・製品開発関連の研究試作品は、産地、生活者、市場のニーズ、課題等に対応して企画、制作されたものである。過去の研究報告書をみると試作年度・テーマ、開発の背景、コンセプト、素材、技術等の製品の情報が明確であり、今日に通用する製品デザインが多数ある。産地陶磁器関連業界からも、現物の閲覧、製品開発への利用、一般公開、展示など、産地業界に向けた利活用の要望が寄せられている。

そこで試作品全体の資料的な価値を高めるため、令和 3~4 年度は、古い試作品から順次、それぞれの詳細情報を抽出して作品画像とともにデータとして集約し、検索機能等を付与しデータベースとして機能する、デジタルアーカイブの構築に取り組んだ。

本年度は、前年度構築したデジタルアーカイブをさらに充実させるべく、引き続き試作品の画像や情報のデータ化を継続するとともに、データベースとしての機能活用をはじめ、構築したアーカイブの活用による試作品や資料の利用場面を複数想定し、実際の活用法を検討して具体化する。それにより、デジタルアーカイブ利用による具体的な試作品の運用イメージが明確になり、利活用を円滑に進めることができる。

2. 研究方法

2.1 試作品デジタルアーカイブ構成検討

前年度に引きアーカイブの整備を継続し、当試験場が

保有する、デザイン、製品開発関連研究の未登録の試作品の画像、情報のデータ化を進めた。産地業界等各方面がデジタルアーカイブを活用して試作品とその情報を広く閲覧・利活用するための具体的な仕組みと方法を検討し、活用場面とその方法を提示した(図 1)。アーカイブの試作品データを活用して資料分析を行い、試作品の資料的価値を向上させた。

2.2 試作品台帳作成

研究報告と試作品を照合し、詳細情報と作品画像を合わせ、アーカイブの素材となる台帳(図 2)を作成した。

試作品数が膨大であるため、製品名やセットごとにまとめて記載した。整理項目は、製作年度、研究テーマ、担当者、製品名、アイテム、試作情報(材質、焼成条件)、保管場所、研究報告書掲載箇所その他、展示会出品・受賞歴等の関連情報も加えた。



図 1 デジタルアーカイブ構成イメージ

*1 産業技術センター 瀬戸窯業試験場 製品開発室 (現技術支援部 瀬戸窯業試験場 製品開発室) *2 産業技術センター 瀬戸窯業試験場 製品開発室 (現技術支援部 瀬戸窯業試験場 セラミックス技術室)

年度	西暦	テーマ	研究員	作品画像	品名	アイテム数	ジャンル	材質	試作データ	所属等	保管	出品
546	1971	不明	本多正之		ユニット花瓶	花器2	2	磁器、装飾品	縁辺成形 ガス炉1200°C、OF下焼成材(スクリーン、ゴム紙等、半焼品)	第3回試作報告書目録	資料	第6回陶磁器試作研究会報告書(第47年度2月)
547	1972	未利用資源による磁器器のデザイン研究	坂村忠也、本多正之、武大、森重		モーニングセット	ミルクカップ、プレート、ボール	6	磁器、食器	セット製(ステンウェア) 水野幹太郎、白川みづ子(水野幹太郎、白川みづ子) 再成形焼成、釉薬	47年度研究報告書目録(47-5) P.69-77	資料	第6回陶磁器試作研究会報告書(第48年度2月)
547	1972	未利用資源による磁器器のデザイン研究	坂村忠也、本多正之、武大、森重		чай-セット	カップ、ソーサー、ポット、リザーヴァー	5	磁器、食器	セット製(水野幹太郎、白川みづ子) 再成形焼成、釉薬	47年度研究報告書目録(47-5) P.69-77	資料	第6回陶磁器試作研究会報告書(第48年度2月)
548	1973	水野幹太郎の試作品について	坂村忠也、本多正之、武大、森重		文房	ペン、文房	3	磁器、文具、アクリル	セット製(水野幹太郎) 再成形焼成、釉薬	48年度研究報告書目録 P.53-65	資料	第7回陶磁器試作研究会報告書(第49年度2月)
548	1973	水野幹太郎の試作品について	坂村忠也、本多正之、武大、森重		ユニット式卓上セット	ペン入れ、タバコ入れ、灰皿、燗酒しぼり、一輪挿し	6	磁器、卓上用品、セット	セット製(水野幹太郎) 再成形焼成、釉薬	48年度研究報告書目録 P.53-65	資料	第7回陶磁器試作研究会報告書(第49年度2月)

図2 試作品台帳(部分)

3. 結果及び考察

3.1 デジタルアーカイブの拡充

当試験場が保有する、デザイン、製品開発関連研究の未登録の試作品の画像、情報のデータ化を進めた。

3.2 デジタルアーカイブ活用方法の提示

産地業界等各方面がデジタルアーカイブを活用して試作品とその情報を広く閲覧・利活用するための具体的な仕組みと方法を検討し、活用場面とその方法を提示した。

3.2.1 試作数の推移と特徴

アーカイブの試作品データを活用して資料分析を行い、試作品の資料的価値を向上させた。

時代背景の一例として、昭和期の試作数の推移(図3)を見ると、試作点数は概ね年毎に増加している。これは国内外の陶磁器市場の拡大に伴う産地業界組合の製品開発やデザインへのニーズ増大に連動していると考えられる。

昭和48年度からは、新規試作品が産地組合の新作展をはじめとする複数の展示会に出展され、昭和57年度以降は産地組合との連携により試作研究を実施して、多数商品化している。昭和53年度~60年度にかけてはピース数の多い食器セットや製品シリーズによる試作提案が多数行われた。試作の製品種類の構成比(図4)を見ると、ノベルティ・置物類が全体の約4割を占めており、輸出向けノベルティ製品をはじめ、置物、装飾品、土産物の製造が盛んな当時の瀬戸の陶磁器製造状況を反映した試作内容であることがわかる。

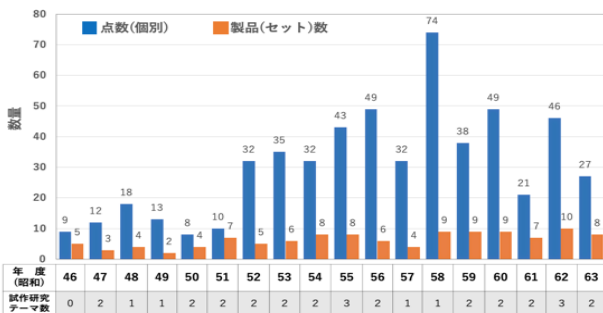


図3 試作数の推移

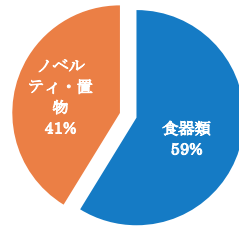


図4 構成比

3.2.2 試作テーマと内容の推移

昭和46年の開所から初期に実施された「未利用資源の活用」や「産業廃棄物の活用」、「イングレース一度焼成技術」による製品試作は、当時危惧された陶磁器原料枯渇やオイルショックを契機とした、省エネなどの産業的な課題に対応した研究として実施された。

昭和49年度以降から50年代前半にかけては、「呉須の発色」「イングレース加飾」「液体顔料による加飾」「上絵付を中心とした製品開発」等、加飾技法の高度化をテーマとして試作研究が実施され、提案性の高い食卓用品や食器セットが多数試作された。

昭和50年代後半以降は、経済成長を背景とした生活水準の大幅な向上、核家族化をはじめとしたライフスタイルの変化、市場の成熟と消費ニーズの多様化、商品の個性化等を反映し、素材研究や製造技術の開発に伴う試作から、製品企画やデザイン提案を中心とした製品開発研究へと移行している。昭和59年度、60年度には、アパレルファッションと連動した商品企画や、ギフト向け商品などにより産地の個性が薄れた瀬戸の陶磁器デザインに対し、「産地の伝統的素材や技術の活用」による他産地製品との差別化を図った。バブル期に入る昭和61年度から63年度には、消費者ニーズの多様化、個性化の進行や価値意識の変化に対応する新たなデザイン手法として「異種素材の活用」を取り上げ、陶磁器製品のパーツ等に金属や木材、繊維素材を組合せた飲食器、インテリア製品を提案した。いずれもデザイン性、機能性に「意外性や遊び心」加えた独創的製品であり、時代に適合する製品デザインとして産地業界の関心を集め、多数製品化された。

4. 結び

過去の試作品の画像および情報のデータ化を完了した。アーカイブの活用のための具体的な仕組みとその方法を産地業界の関係者に提示した。研究試作品等をデジタルアーカイブ化して「見える化」することにより、和洋飲食器やノベルティ等、業界の企業のデザイン開発意欲を向上させることができた。アーカイブを活用したデザイン開発事例を示すことで、企業の製品開発力の強化、引いては波及効果に繋がると考えられる。